

汎用的な資質・能力と音楽科固有の資質・能力との関連性

—文部科学省研究開発指定校の取り組みを中心に—

三村真弓
(本学大学院教育学研究科)

吉富功修
(本学名誉教授)

岡田知也
(香川大学)

長澤希
(広島文教女子大学)

梅比良麻子
(広島大学附属小学校)

松下友紀
(広島県立西条特別支援学校)

The Relationship between Generic Competency and Music-Specific Attributes and Abilities: Experimental Schools of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology

Mayumi MIMURA Katsunobu YOSHITOMI Tomoya OKADA
Nozomi NAGASAWA Asako UMEHIRA Yuki MATSUSHITA

Abstract

The current study examined experimental schools of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, which were set up to research generic competency. The current study sought to clarify the relationships between generic competency and music-specific ability in these experimental schools.

All of the schools and kindergartens examined in the current study aimed to foster generic competency in new domains and new subjects, and showed a clear connection between other existing subjects including music and these new domains and/or subjects. We founded the attributes, abilities, aims and content in music were connected to generic competency. Music was not just a tool to foster generic competency. As mentioned above, in all of the schools we examined, competency in specific subjects was not the focus. The current results raised several important suggestions for improving curriculum management.

I 研究の背景と目的

21世紀の社会は、加速度的な人工知能の進化により、およそ10年後には予測ができないような急激な変化が生じるとされている。イギリスのオズボーン氏は、相手の意図や気持ちを理解したり、交渉や説得をしたり、様々な配慮をしたりするための「社会的知性」や、コンピューター化できない「創造的なスキル」が大事であるとしている。したがって、今後の教育界においては、未来の社会を生き抜いていくために必要な資質・能力の育成が必要となるのである。昨今の世界的動向として、キー・コンピテンシーの概念をもとに、21世紀に求められる資質・能力を定義し、それを基盤にしたナショナルカリキュラムを開発する取り組みが盛んに行われている。このような中で、平成25年3月に出された、国立教育政策研究所の報告書では、諸外国の教育改革における汎用的な資質・能力をもとに、21世紀型能力が提案された。

この方向性に基づき、複数の文部科学省研究開発指定校において、未来の社会を生き抜いていくために必要な資質・能力の研究が進められてきた。研究開発指定学校では、汎用的な資質・能力の育成のため学校全体としての教育目標や教育内容を決定し、それに基づいて教育課程を作成する。カリキュラム・マネジメントの側面の1つである「学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点」は重要であるが、「目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく」(文部科学省 2017, p.37)は、教科が手段となる危険性を

はらんでいる。汎用的な資質・能力育成のために音楽科の目標や内容を考えるのではなく、音楽科固有の資質・能力とは何かを探究し、そのうえで汎用的な資質・能力との関連を明らかにする必要があるだろう。これによって、カリキュラム・マネジメントの在り方に関して重要な示唆を得ることができると思う。

本研究では、汎用的な資質・能力を育むことを研究課題としている複数の文部科学省研究開発指定校において、汎用的な資質・能力と音楽科固有の資質・能力とをどのように関連付けているのかを明らかにすることを目的とする。研究対象として、平成27年度から平成30年度までに研究開発指定最終年度を迎えた国立大学附属学校園の中から、新潟大学教育学部附属幼稚園・附属長岡小学校・附属長岡中学校、広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校、広島大学附属小学校、香川大学教育学部附属高松小学校、上越教育大学附属中学校を取り上げる。

Ⅱ 社会の変化に対応する汎用的な資質・能力

1 世界における資質・能力に基づく教育改革の動向

平成25年3月に出された国立教育政策研究所の報告書では、「世界においても、今日的に育成すべき人間像をめぐって、断片化された知識や技能ではなく、人間の全体的な能力をコンピテンシー (competency) として定義し、それをもとに 目標を設定し、政策をデザインする動きが広がっている。」(国立教育政策研究所教育課程研究センター2013, p.13) としている。これは、OECD の DeSeCo プロジェクト (1997-2003) によって定義された「キー・コンピテンシー」の概念が、PISA や PIAAC などの国際調査にも取り入れられ、世界に大きな影響を与えたことがきっかけとなっている。報告書では、世界の主な国で求められている資質・能力をまとめ、次の4つの特徴を示唆している。①どの目標も、言語や数、情報を扱う基礎的なリテラシーと、思考力や学び方の学びを中心とする高次認知スキル、社会や他者との関係やその中で自律に関わる社会スキルの3層に大別できる。②従来の領域や教科名が直接現れるのは基礎的なリテラシーに集中し、認知スキルや社会スキルは教科を超えた汎用的な能力を規定したものとなっている。③全体のバランスとして、認知スキルと社会スキルに重みが置かれており、社会スキルは、社会の中で「生きる力」に直結するものになっている。④社会スキルは、各国の社会・文化・歴史的背景の影響を一番大きく反映するためか、国や機関ごとにより用語や内容が異なり、多様である (同前書, p.14)。本研究で着目する汎用的資質・能力は、認知スキルや社会スキルに該当するものである。従来の領域や教科が直接関与する基礎的なリテラシーが、認知スキルさらに社会スキルにどのように反映し、繋がるのかが重要な点である。

2 我が国の21世紀型能力

報告書では、世界の教育界の動向をもとに、21世紀を生き抜く力を「21世紀型能力」と名付け、その試案を提案した (図1)。21世紀型能力とは、「21世紀を生き抜く力をもった市民」としての日本人に求められる能力である。中核に、「思考力」を位置付け、その下に、思考力を支える「基礎力」を設定し、最も外側に、思考力の使い方を方向づける「実践力」を位置付けている。「思考力」とは、「一人ひとりが自ら

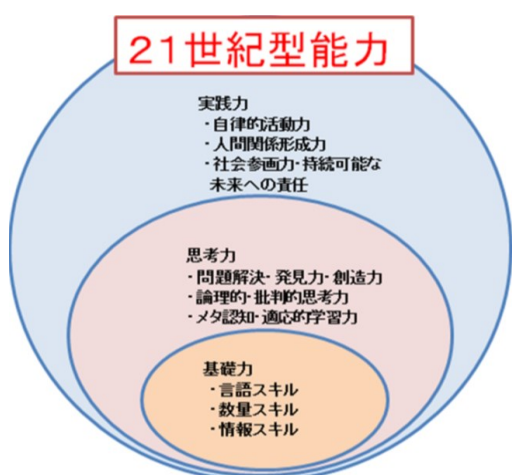


図1 21世紀型能力 (同前書, p.26)

学び判断し自分の考えをもつて、他者と話し合い、考えを比較吟味して統合し、よりよい解や新しい知識を創り出し、さらに次の問いを見つける力」である。「基礎力」とは、「言語、数、情報 (ICT) を目的に応じて道具として使いこなすスキル」である。「実践力」とは、「日常生活や社会、環境の中に問題を見つけ出し、自分の知識を総動員して、自分やコミュニティ、社会にとって価値のある解を導くことができる力、さらに解を社会に発信し協調的に吟味することを通して他者や社会の重要性を感得できる力」である (同前書, p.27)。図1の「思考力」や「実践力」に含まれている様々な能力は、汎用的資質・能力であり、文部科学省研究開発指定校の研究で育成を求めている資質・能力とほぼ一致している。「思考力」の一部及び「基礎力」は教科で育めるが、「実践力」は教科のみでは難しい。しか

し、学校教育で学んだことを社会や実生活で活かすためには、あるいは予測不可能な未来を子どもたちが生き抜いていき、未来を創世するためには、実践力が重要である。したがって、多くの研究開発指定校では、新領域・新教科を設立し、汎用的資質・能力の育成をめざしているのである。

Ⅲ 文部科学省研究開発指定校の取り組み

1 新潟大学教育学部附属幼稚園・附属長岡小学校・附属長岡中学校（平成22年度～平成27年度）

新潟大学教育学部附属幼稚園・附属長岡小学校・附属長岡中学校は、平成22年度から平成24年度までの第1次研究に引き続き、平成25年度から平成27年度まで第2次研究に取り組んだ。研究開発課題は、『『社会的な知性』を培うための幼・小・中一貫教育による知の循環型教育システムの研究開発』である。

「社会的知性」とは、現代社会の様々な問題に主体的にかかわりながら、従来の枠組みにとらわれず、新たな発想で他者と手を携えながら解決していける人が備えるべき問題解決能力である。研究のねらいとして、これからの時代に必要となる「社会的な知性」を「持続可能な社会を創り上げる資質・能力」ととらえ、それを具体的に明らかにすることとし、「知の循環型教育」がシステムとして機能するカリキュラムを、①新設教科「社会創造科」の充実、②幼小中一貫カリキュラムの整備、③「協働型学習」の充実、の

3つの視点から開発した（新潟大学教育学部附属幼稚園・附属長岡小学校・附属長岡中学校 2016a, p.1）。「知の循環型教育システム」とは、子どもが集団の構成員として、自らの問題意識に基づいて考え学んだことを様々な人に還元したり、様々な人から学んだことを自らの学び方や人とのかかわり方等に活用したりする営み、すなわち「互恵的なかかわり」が教師の意図的・組織的な指導・支援のもとで、子どもたちによって主体的に展開されるカリキュラムである（同校園 2016a, p.2）。図2は、教育課程全体の構造図である。「社会創造科」と各教科等と幼児教育で構成されている。

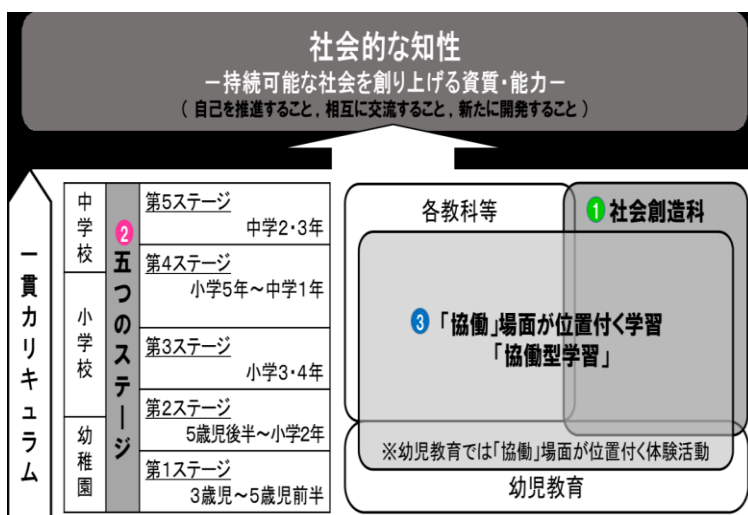


図2 カリキュラムの構造（同校園 2016a, p.13）

があり、また幼児教育とも繋がっている。そして、三者のどれにも「協働型学習」が大きく位置付いている。めざす子ども像は、「互いに尊重し合う人間関係をつくり、学んだ知識や培ってきた力を生かしながら、人々の暮らしや環境、社会の諸問題へ目を向け、持続可能な社会を創り上げるために、自ら考え、判断し、実践することのできる主体的な子ども」である（同校園 2016a, p.11）。

「社会創造科」で育む3つの資質・能力は、「自己を推進すること」「相互に交流すること」「新たに開発すること」である。各教科等においても、その3つの資質・能力との関連が記載されている。表1は、「社会創造科」と音楽科との関連を表したものである。「自己を推進すること」（「自己の認識」）→「音楽を感じ取り表すこと」は、音楽や自他の表現から知覚・感受したことを支えに、思いや意図をもって表現したり、想像力を働かせて鑑賞したりすることである。音楽から感じ取ったことを言葉で表すことで、自分と音楽とのかかわりを明確にする。多様な音楽と出会い、自分の感じ方を広げていけるような資質・能力の向上をめざす。「交互に交流すること」（「志の共有」）→「音楽の感じ方、表し方を認め合うこと」は、音楽を形づくっている要素の働かせ方の根拠や実際の表現から感じたことを基に、互いの感じ方を共感的に理解し、重なる思いを強くしたり互いのずれを克服しようとしたりして、表現の仕方を明確にもつことである。仲間とともに音楽をつくることは、それぞれの思いや願いを重ねていくことが大切である。そのためには、互いの考えや感じ方を受け止めながら音楽を表現する資質・能力の向上をめざす。「新たに開発すること」（「創造」「発信」）→「新たな音楽の表し方で伝えること」は、聴き手にどのように伝えるかを考

表1 「社会創造科」で育む3つの資質・能力と音楽科で育む3つの資質・能力との関連 (同校園 2016a, pp.15-16, 2016b, p.9)

3つの資質・能力		観点	音楽	音楽科で育む3つの資質・能力
自己を推進すること	自己を見つめ、ひと・もの・ことへの愛情・愛着をもち、見通しをもって問題解決に取り組み、よりよい自分をつくること	自己の認識	◎	音楽を感じ取り表すこと
		価値の認識	○	
		立志・計画	○	
		責任の遂行・粘り強い取組	○	
相互に交流すること	対話を通して他者とかかわり、他者と共に問題解決に取り組み、よりよい人間関係をつくること	他者の認識	○	
		志の共有	◎	音楽の感じ方、表し方を認め合うこと
		他者との協力	○	
		対話や議論への参加	○	
新たに開発すること	自ら考えたり、他に考えを求めたりして、問題解決に取り組み、持続可能性の視点に基づいた新たな考えをつくること	現状の把握・分析	○	
		熟考	○	
		創造	◎	新たな音楽の表し方で伝えること
		発信	◎	

え、仲間との音楽活動を通して創った表現をさらに高めることである。自分の思いを表すためのふさわしい表現活動を求めるように、資質・能力の向上をめざす(同校園 2016b, p.9)。

これをもとに、「音楽科 資質・能力発展表」が記載されており、第2ステージから第5ステージまで、3つの資質・能力に即した具体的な音楽の内容が書かれている(同校園 2016b, p.19)。また、小学校1年生から中学校3年生まで、題材・主教材、「協働」場面の位置付け、表出が期待される主な

資質・能力(「自己を推進すること」「相互に交流すること」「新たに開発すること」)の具体的な内容が示されている(同校園 2016b, pp.50-53)。

本校園の特徴として、「社会創造科」で育む3つの資質・能力が各教科と繋がりやすいものであり、音楽科本来の目標がうまく当てはめられていること、双方の授業で共通して協働型学習を重視していることで両者の繋がりが深まり、子どもたちの資質・能力の育成に効果があることが挙げられる。

2 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校 (平成24年度～平成29年度)

広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校は、平成24年度から平成26年度までの3年間、さらに平成27年度から平成29年度までの3年間の延長指定を受け、計6年間の研究開発を行った。研究開発課題は、「社会的自立の基礎となる資質・能力及び態度・価値観の体系的な育成のための、幼小中一貫の新領域を核とした自己開発型教育の研究開発」である(広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校 2018, p.1)。



めざす子ども像は、「様々な人々とともに、積極的に、粘り強く課題解決に取り組む中で、社会において有為な人となるべく自己の向上をはかる子ども」である(同上)。このような子どもの育成のために、小学校・中学校に新領域「希望(のぞみ)」(総合的な学習の時間の全時間+道徳・特別活動から各10時間)を設定し、幼稚園に「希望(のぞみ)視点の保育」を設定した(同前書, pp.13-14)。具体的な内容は、①新領域「希望(のぞみ)」と「保育・教科」にまたがる12年間一貫カリキュラムの開発、②通教科的能力と関連的に育成する保育・教科の本質に根ざした資質・能力の指導方法・内容の開発、③道徳と特別活動の時間の一部を「希望(のぞみ)」に組み入れた効果の検証である(同前書, p.1)。幼小中12年間を、「発達と接続」を意識した5区分(入門期:年少・年中、幼小接続期:年長・1年・2年、中間期:3年・4年、小中接続期:5年・6年・7年、最終期:8年・9年)に分け(同前書, p.18)、異校種・異学年を越えた子どもたちの活動や教員の乗り入れ授業・活動等を行い、学校園全体でカリキュラム開発及び

図3 教育課程構造図 (同前書, p.26)

評価法の開発に取り組んだ。全教育課程は、新領域「希望（のぞみ）」と「希望（のぞみ）」視点の保育と各教科等で構成されている（図3）。「希望（のぞみ）」で育む社会的自立のための資質・能力は、キャリアプランニング能力、人間関係形成・社会形成能力、課題対応能力の3つであり、育成する態度・価値観は、自律、共生、参画の3つである（同前書、p.1）。この3つの資質・能力を、学校教育活動全体を通して育成する資質・能力ととらえ、「通教科的能力」として位置付けて、「希望（のぞみ）」だけでなく、保育・教科においても育成をめざす教育課程を開発・実践し、その成果を検証した（同前書、p.17）。最初の3年間で通教科的資質・能力育成のためのカリキュラムを作成し、延長1年目（第4年次）からは、「希望（のぞみ）」と各教科等との関連を視野に入れた全教育課程を作成するため、「通教科的能力と関連的に育む教科の本質に根ざした資質・能力」を探究し、12年間の成長を見通した評価規準を各教科で作成した（同前書、p.27）。

表2 音楽科の本質とめざす子ども像
(同前書、p.41)

音 楽 科	
音楽科の本質	<ul style="list-style-type: none"> ○ 音や音楽を通して他者とかかわること ○ 自己表現すること ○ 感性を働かせること ○ 美しいものへの感動を得ること ○ 多様性を認め合うこと
めざす子ども像	音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けながら創造していくことのできる子ども

音楽科の本質とめざす子ども像は、表2である。これをもとに、表3は、通教科的能力と音楽科の資質・能力との関連を表している。音楽科の資質・能力は教科の本質に根ざしたものであり、音楽科は通教科的資質・能力育成の手段とはなっていない。さらに、通教科的能力と関連的に育む音楽づくり・創作に関する音楽科の本質に根ざした資質・能力の系統表が、学年5区分に分けられて詳細に示されている（同前書、p.57）。

本校学園の特徴は、「希望（のぞみ）」で培うべき資質・能力を各教科等でどのように育成するのかという視点で教育課程開発をめざしたのではなく、各教科等の本質に根ざした資質・能力を見出し、それと通教科的資質・能力との関連を踏まえた教育課程を開発したことである。

3 香川大学教育学部附属高松小学校（平成25年度～平成28年度）

香川大学教育学部附属高松小学校は、平成25年度から平成28年度まで4年間研究開発学校指定を受け、さらに平成29年度から平成31年度までの3年間、教育課程特例校の指定を受けている。研究課題は、「豊かな人間性と創造性を育むために、道徳・特別活動・総合的な学習の時間を統合した新領域『創造活動』を創設し、多様な集団や価値観の中で、『分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成』に向けた教育課程に関する研究開発」である（香川大学教育学部附属高松小学校 2017, p.3）。カリキュラムは、「創造活動」と「教科学習」の2領域で構成されている（図4）。

カリキュラム全体で育む子どもの姿を、「多様な価値観や背景をもった仲間と喜びも悲しみも理解し合い、自らの生き方・在り方を生み出すと共に、個性的・創造的に取り組み、新しくよりよい問題解決のために必要な知や価値を生み出す子ども」と設定し、めざす子どもに必要な資質・能力として、「学び続ける力」、「関わる力」、「創造する力」の3つを設定した。そして、知を創造する力を育む「教科学習」と、価値を創造する力を育む「創造活動」という2領域を設定した。また、2領域に共通して、授業づくりの「しかけ」として、「志向」「共感や協同」「有用」を設定し、子どもの動機付けを図り、子どもの感受・想像・意味付ける姿を豊かにする。カリキュラムの一番下に、教科学習と創造活動の学びの基盤となるものとし

表3 通教科的資質・能力と音楽科の本質に根ざした資質・能力（同前書、pp.17, 41）

通教科的資質・能力		音楽科の本質に根ざした資質・能力
キャリアプランニング能力 ＜なりたい自分になる力＞	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら自ら主体的に判断してキャリア形成していく力	音楽に対する感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出す中で、音楽による自己表現をしたり、音や音楽に対して自分なりの価値を考えたりすることができる。＜自己表現、価値の創造＞
人間関係形成・社会形成能力 ＜関係を構築する力＞	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力	音や音楽に対する気付きや感じたことを交流したり、仲間とともに音楽を創り上げたりする中で、多様な価値を認める柔軟な発想を持ち、共感したり、一体感を味わったりすることができる。＜共有＞
課題対応能力 ＜達成へ向かう力＞	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力	音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点でとらえて考え、感性と知性を働かせながら、豊かな表現を追究することができる。＜追求＞

分かち合い、ともに未来を創造する子どもの育成		
学び続ける力	関わる力	創造する力
夢や憧れをもち、自律的に学び続ける力	「ひと・もの・こと」へ共感的・協同的にかかわる力	問題を解決し、知や価値を創造する力
「生き方・在り方」の深化		
学びの意味を考え、学びを自分の生活や行動につないでいくこと、また、それらを通して、自分の人生や 将来について考えていくこと、つまり、学びを常に自己との関係で見つめ、問い続けること。		
教科学習		創造活動
知の創造		価値の創造
感覚・感性を働かせ、仲間と学び合う中で、自分にとって意味のある知を生み出すための見方・考え方を育む		多様な集団との探究的な問題解決の中で、自分にとって意味のある価値を生み出すための見方・考え方を育む
志向	共感や協同	有用
授業づくりの「しかけ」		
支持的風土		
(教科学習と創造活動の学びの基盤となる学級集団づくり)		

図4 カリキュラム構造 (同校 2015, p.13)

教科学習の評価規準「目標」	養いたい資質・能力	創造活動の評価規準「目標」
主体的な態度	学び続ける力	主体的な態度
共感的・協同的な態度	関わる力	共感的・協同的な態度
見方・考え方	創造する力	見方・考え方
知識・理解・技能		価値

図5 領域の評価規準と資質・能力との関係 (同校 2015, p.14)

表4 各領域の本質と音楽科の本質 (同校 2017, pp.5-6, 2015, p.134)

創造活動の本質	教科学習の本質	音楽科の本質
異学年集団での問題解決や個人追究での問題解決を通して学び続ける力、関わる力、創造する力を養うこと	各教科の重要な概念を理解することに留まらず、実社会・実生活で自分にとって意味のある知を再構成するために必要な見方・考え方。知識・技能、情意的な態度を養い、自分なりに世の中を捉え直すこと	音楽の面白さやよさ、美しさを感じ、音楽を楽しみながら生活を豊かにしていくこと

表5 各領域の目標と音楽科の目標 (同校 2017, pp.5-6, 2015, p.134)

創造活動の目標	教科学習の目標	音楽科の目標
感覚・感性を働かせ、多様な価値観や背景をもつ集団との望ましい人間関係づくりや探究的な活動での生き方・在り方の深化を通して、夢や憧れをもち自律的に学び続ける力や「ひと・もの・こと」への共感的・協同的に関わる力、問題を解決し知や価値を創造する力を養う。	感覚・感性を働かせ、教科の本質に迫る学習活動を通して、自分にとって意味のある知を創造するための主体的な態度や共感的・協同的な態度を養うとともに、基礎的な知識・技能を身に付け、見方・考え方を育む。	音楽の面白さやよさ、美しさを素直に感じ、友達とその面白さやよさ、美しさについて語り合いながら、豊かな表現を吟味しようとする態度や音楽を愛好する心情の育成を図ることである。

表5の音楽科の目標は、音楽科の本質を踏まえたうえで、教科学習の目標に関連した内容となっている。音楽科で育みたい見方・考え方は、音楽を聴いて感じ取ったことから音楽を形づくる諸要素に着目してイメージを膨らませ、そのイメージを音楽の面白さからよさへと広げて考える(同校 2015, p.134) こととしている。

創造活動と教科学習との関連について、次のように述べられている。教科で養われた見方・考え方が創造活動では欠かせないものである。2領域の教科学習と創造活動を直接的に関係させるよりも、互いの独

て、支持的風土づくり(学級集団づくり)を設定している。さらに、2領域の目標を達成することが、カリキュラム全体の目的につながるように、学びの意味を実感する「生き方・在り方」の深化を重要視している(同校 2015, p.13)。

資質・能力は、それぞれの領域の本質に根ざした深い学びを通して育まれる情意的な態度、他者と関わる態度、見方・考え方、知や価値の総体であり、資質・能力を直接的にめざした学びではなく、むしろ、それぞれの領域の本質に迫る問題解決的な学びのプロセスを重視し、情意的な態度、他者と関わる態度、見方・考え方、知や価値を育むことが、資質・能力の育成につながると述べられている(同校 2015, p.14)。図5は、2領域の目標と資質・能力との関連である。どちらの領域からも「深い学び」(矢印の部分)によって資質・能力が育成されるのである。

表4の音楽科の本質は、進んで音楽とかかわり、創り出すことを通して、音楽に対する感性と豊かな情操を養うことである。音楽科でめざす子ども像は、音楽の面白さやよさ、美しさを感じ、自分にとって意味のある音楽を見出す子どもである。音楽科の授業づくりの「しかけ」として、「志向」は、表現との出会い、表現の視覚化、「共感や協同」は、1つの表現に向かって、様々な表現から感じて、「有用」は、捉え方の変容、表現を楽しむ、と設定されている(同校 2015, p.135)。

自性を生かしながら共通の目的をめざすことで、教科学習が創造活動の学びをより豊かにするとともに、創造活動の学びが教科学習の学びをより豊かにすることができる。創造活動で生じた問題に対して、教科で育てた見方・考え方で問題解決の方略や探索、実施を行う。どうしても解決できない場合は、子ども自らが教科の学びを振り返り、問題を解決するための見方・考え方を再構築していく。教科学習では創造活動の理念を取り入れ、子どもの思いや願いを大切に授業づくりを行った結果、教師の指導観や教科観が変わり、やわらかい授業づくりを行うようになってきた。認知面側面だけでなく情意的側面も意識したことにより主体性や共感・協同の姿が見られた。創造活動では、教科学習の3つの授業づくりの「しかけ」を取り入れ、活動を子どもとつくることで、継続的な課題の設定や子どもの生き生きとした姿を生み出した。また教科学習において、創造活動を意識して問題解決に向けたグループづくりの在り方を学ぶことで、より複雑な問題解決に向けたグループづくりを主体的に行う姿が見え始めた。このように創造活動を創設することで、教科学習の授業が変わり、教科学習の授業が本質的に深まることで、創造活動の取り組みも豊かになるとされている（同校 2017, p.17）。

本校の特徴は、創造活動と教科学習が対等な2領域として独立して設定されていること、資質・能力を直接的に育むことを目的とするのではなく、それぞれの領域の本質に根ざした深い学びを通して育まれる態度、見方・考え方、知や価値が資質・能力に繋がるとしていること、各領域で育まれたそれらが他領域に対して相互に有効な影響を与えていることである。

4 広島大学附属小学校（平成 26 年度～平成 29 年度）

広島大学附属小学校は、平成 26 年度から平成 29 年度まで研究開発学校指定を受けた。研究課題は、「ESD（持続可能な発展のための教育）の実践・普及の拠点であるユネスコスクールとして、大学、地域のステークホルダーと連携し、国内外における交流を図りながら、グローバルに活躍するために求められる資質・能力を育み、国際的視野をもつグローバル人材の育成を図ること」である（広島大学附属小学校 2018, p.1）。

表 6 研究構想図（同前書, p.9）

各教科固有で育成する資質・能力	資質・能力	教科の枠をこえて育てる資質・能力					
		資質・能力の要素	低学年	中学年	高学年		
主体的・積極的に読書に取り組み、読書を通して、様々な人のなかに参入する態度	国語	アイデンティティ	好きなことが言える ・家族や友達を見つめる	よいところが言える ・地域や国を見つめる	・発音ができる ・国や世界を見つめる		
グローバル社会を構成する一員として、グローバル社会に積極的にいかかわる態度	社会						
協働的に算数を創る態度	算数						
自然の事物・現象にかかわる態度	理科	他者との協働	・自分のことを伝えながら活動する	・相手のことを尊重しながら活動する	・友好な関係をつくりながら活動する		
音楽の感じ方や音楽に対する思いや意図に共感する態度	音楽						
造形活動を通して、他者を思いやりながら積極的にいかかわる態度	造形	新たな価値の創造	・人とかかわりを大切にす意識をもつ	・自然や平和への畏敬をもつ ・多面的な考え方もつ	・グローバルな志向をもつ		
共に学び合い、ともに文化を共有し合う仲間として他者を認め合い、結び合う態度	体育						
英語を使ってコミュニケーションを図る態度	英語						
読書を通じた思考力・判断力・表現力・感情／情報	国語	文脈に応じて全体を向上させる思考力・表現力	問題解決力	問題の設定	・疑問をもつ	・相違に気付く	・事象を捉える
グローバルな変化に対する主体的な思考力・判断力・表現力	社会			情報の収集	・選ぶ	・集める	・探す
数学的な思考力・表現力	算数			整理・分析	・特徴に気付く	・結び付けて考える	・背景を考える
科学的な思考力・表現力	理科		まとめ・表現	・感想・意見をもつ	・考えを整理する	・考えを吟味する	
知覚・感受したことをもとに音楽表現を工夫する力、創作する力、評価する力	音楽		論理的思考力	・理由をもつて考える	・根拠をもつて考える	・複数の根拠をもつて考える	
造形活動を通じた表現力・作品を鑑賞する力	造形		批判的思考力	・受け入れる、認める	・判断する	・代替案を考える	
運動についての思考力・判断力	体育		反省的思考力	・自分の立場で考える	・相手の立場で考える	・全体的な視野で考える	
英語を活用した思考力・表現力	英語						
読書に関する知識・技能	国語						
グローバル社会を解釈するために必要な知識・技能	社会						
数量や図形についての知識・技能	算数						
科学的知識・技能	理科						
表現と鑑賞の基礎的・基本的な知識・技能	音楽						
材料や用具、技法についての知識・技能	造形						
運動についての知識・技能	体育						
言語や文化に関する知識・技能	英語						

グローバル人材とは、「主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ友人、仕事仲間や仕事相手、地域住民等に対して自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差を乗り越えて、相手の立場にたって理解し、そうした差異からそれぞれの考えを引き出して活用し層状効果を生み出して、新しい価値観を生み出すことができる人」(同前書, p.10)と規定している。これを踏まえ、「自ら学び 自他のレベルを向上させる リーダーとして活躍できる子ども」を、めざす子ども像とした(同前書, p.11)。

表7 育てたい3つの資質・能力と音楽科のつながり (同前書, pp.17, 35)

資質・能力	資質・能力の要素	音楽科で育てる資質・能力	
生きるために必要となる知識・技能 【知識・技能】	各教科における基礎的基本的な知識・技能	◎	表現と鑑賞の基礎的・基本的な知識・技能
文脈に応じて全体を向上させる思考力・表現力 【思考・表現】	問題解決力	○	知覚・感受したことをもとに音楽表現を工夫する力、創作する力、評価する力
	論理的思考力	◎	
	批判的思考力		
	反省的思考力		
アイデンティティをもち、異なる文化や価値観をもつ他者との共生を求める態度や共生を創りあげる力 【共生を創る態度】	アイデンティティ		音楽の感じ方や音楽に対する思いや意図に共感する態度
	他者と協働する力	○	
	新たな価値観を創造する力	◎	

◎…特に力点を置いている取組み ○…力点を置いている取組み

表8 全体でめざす子ども像と音楽科でめざす子ども像との関連 (同前書, pp.11-12)

	子ども像	音楽科の子ども像
高学年	自ら学び、自他のレベルを向上させる、リーダーとして活躍できる子ども	知覚、感受したことや、互いの思いを交流することによって得られた音楽的アイデアをもとに、新たな表現の工夫や新たな聴き方をすることができる子ども
中学年	自ら学び、自他の相違を生かし、協働することができる子ども	互いの音を聴き合ったり教え合ったりしながら、音楽についての思いや考えを伝え合い、ともに歌ったり聴いたりすることができる子ども
低学年	自ら学び、自他の相違を認め、つながりをつくることのできる子ども	楽曲の気分を感じ取りながら、友達と一緒に楽しく歌ったり聴いたりすることができる子ども

教育課程では、「生きるために必要となる知識・技能」「文脈に応じて全体を向上させる思考力・表現力」「アイデンティティを持ち、異なる文化や価値観をもつ他者との共生を創る態度」の3つの資質・能力の育成を目的としているが、「生きるために必要となる知識・技能」は各教科のみで育成し、残りの2つの資質・能力は各教科及び教科の枠をこえて育成する。

表7は3つの資質・能力と音楽科との関連を、表8は全体でめざす子ども像と音楽科でめざす子ども像との関連を表している。音楽科で育てる資質・能力は、音楽科の本質を捉えたものになっている。

本校の特徴は、新領域・新教科を設定していないが、各教科、及び教科の枠をこえて、教育課程全体において3つの資質・能力の育成をめざしていること、資質・能力の1つは教科のみで育成することから明らかのように、教科を中心とした資質・能力の育成であることである。

5 上越教育大学附属中学校 (平成27年度～平成30年度)

上越教育大学附属中学校は、平成27年度から平成30年度まで、研究開発学校指定を受けている。研究主題は、「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒の育成」である。これからの社会で求められる資質・能力として設定されたのは、「情報統合力」「代替思考力」「企画創造力」「主体的実践力」「コミュニケーション力」「コラボレーション力」の6つの資質・能力であり、アビリティと名付けた。アビリティそのものが、具体的にどのような行動、技能、または態度として表れるのかを『スキル』として表9のように細分化し、これをアビリティ育成の視点としている。研究主題にある「持続可能な社会を創造すること」「自己を確立すること」と「アビリティをあらゆる場面で発揮すること」を同義とし、研究主題でめざす生徒を「グローバル人材」と捉え、アビリティの育成を意図的、計画的に行う新教科「グローバル人材育

完成した「グローバル化の視点を取り入れたカリキュラム」の特徴は、小学校全学年を通じての英語科の実践、既存の教科教育の指導の充実(各教科における「グローバル化の視点を取り入れたカリキュラム」についての研究実践、及び小学校第1学年からの「社会科」「理科」の実践)、小学校第1学年からの総合的な学習の時間における「多文化・多言語交流学習」の実践である(同前書, p.13)。

表6は、各教科固有で育成する資質・能力と、教科の枠をこえて育成する資質・能力との関連を表したものである。教育課程では、「生きるために必要となる知識・技能」「文脈に応じて全体を向上させる思考力・表現力」「アイデンティティを持ち、異なる文化や価値観をもつ他者との共生を創る態度」の3つの資質・能力の育成を目的としているが、「生きるために必要となる知識・技能」は各教科のみで育成し、残りの2つの資質・能力は各教科及び教科の枠をこえて育成する。

表 9 アビリティと『スキル』（同校 2018, pp.6-7)

アビリティ		『スキル』
情報統合力	課題や目的に応じて、必要な情報を集め、まとめる力	情1 情報収集
		情2 情報整理
代替思考力	課題の問題点や物事の本質を捉え直す力	代1 思考拡散
		代2 比較検討
		代3 思考収束
企画創造力	周囲の状況や動向を予測しながら、みんなのためになる活動を創り出す力	企1 目標設定
		企2 手段構築
主体的実践力	内容や活動を調整しながら率先して行動する力	主1 渉外調整
		主2 準備試行
		主3 役割遂行
コミュニケーション力	情報を受信したり、発信したりしながら、様々な考えや意見を認め合い、人やものとの関係を広げる力	コミ1 相互理解
		コミ2 即応思考
		コミ3 情報発信
		コミ4 礼儀作法
コラボレーション力	異なる分野や目的をもった集団が、協力して制作する力	コラ1 協働創造
		コラ2 互惠行動

成科」(総合的な学習の時間の全時間+既存の教科の一部)を創設した。アビリティを育成する教育課程は、「グローバル人材育成科」と各教科及び特別活動によって構成されている(上越教育大学附属中学校 2018, p.4)。「グローバル人材育成科」は、課題討論の時間(主として「情報統合力」「代替思考力」の育成の場)、企画創造の時間(主として「企画創造力」「主体的実践力」の育成の場)、グローバルコミュニケーションの時間(主として「コミュニケーション力」「コラボレーション力」育成の場)で構成されている(同校 2018, p.6)。

一方、各教科において、学習事項の習得とグローバル人材育成の視点としては、「学習活動に関連したアビリティ育成の素地となる『スキル』の向上」「ESDの概念形成」を重視した。各教科では、学習事項習得のための学習活動が『スキル』のように関連しているのかを明確にし、年間指導計画の学習活動に向上をめざす『スキル』を位置付けた。ただし、各教科において学習活動とすべての『スキル』

を関連させるというのではなく、その単元・題材で最も学習効果が期待される活動に焦点を当てた(同校 2018, p.8)。音楽科では、多様な音楽活動を通して音楽のよさや美しさを感じ取り、音を介して他者と関わりながら、新たに見出した音楽の価値を表現したり、鑑賞したりする生徒の育成を目標とし、知覚、感受した自分なりの音楽のよさや美しさについて、主体的に音楽で表現したり鑑賞したりする力を育成することを音楽科の指導の重点としている(同校 2018, p.85)。音楽科で向上をめざす『スキル』と学習活動の例は、表 10 と表 11 である。

本校の特徴は、アビリティそのものを教科で育成するのではなく、各アビリティの具体的な行動、技能、

表 10 アビリティと『スキル』と音楽科の学びとの関連(同校 2016, pp.70-77)

アビリティ	音楽科の学び	具体的な学習活動	『スキル』の具体的な姿
情報統合力	目的に応じて楽譜や音源、その他の文献から、音楽の新しい価値を見いだすために必要な情報を読み取る。 【情報収集】	歌ってみて、その曲を通して聴く人に伝えたいことは何か、グループ内で意見交換を行い、ワークシートにまとめる。	情報収集の捉え：問題点を把握する。
企画創造力	課題を明らかにし、表現したいことを表現するための方法に気づき、それを基に見通しをもって計画的に練習したり、鑑賞したりする。 【手段構築】	意見交換した内容について、聴く人に伝えたい情景や心情については青、そのために工夫した音楽の要素については赤の付箋に記入する。	手段構築の捉え：計画を立てる。
コミュニケーション力	ICT機器を利活用したり、楽器や声で演奏したりして、言葉を交えながら自らの表現を分かりやすく伝える。 【即応思考】	ペアグループで表現したい思いや意図を相手のグループに説明し、本当にそのような歌唱表現ができていのかどうか演奏を聴き愛、互いに評価する。	即応思考の捉え：相手の様子に応じて話す。

表 11 音楽科において向上をめざす『スキル』と学習活動の具体例(同校 2018, p.87)

向上をめざす『スキル』	学習活動の例	活動における『スキル』の具体	『スキル』向上の手立ての例
情2 情報整理	音楽を形づくっている要素を、どう関連付けると、どのような感じの変化が生まれるのか比較、分類する。	自分のイメージを表現につなげるために音楽を形づくっている要素を書き出し、要素がどう変化し、関連しているか整理したり、分析したりする。	表現したい音楽のイメージを基に、音楽を形づくっている要素が作り出す雰囲気を書き込んだ「音楽カルテ」を活用する。
代3 思考収束	自分自身の思いや仲間の思いを組み合わせ、イメージした音楽に近づけるために、関連させた音楽の諸要素やどう変化させたかについて、意図を相手に伝える。	ワークシートに記録したものを活用したり、実際に音にして試して聴いたりしながら、自分たちのイメージを表現するための音楽の諸要素の関連を吟味し、まとめる。	ホワイトボードを活用しながら、グループで思いを伝え合う。音楽の諸要素が生み出す雰囲気を改めて感じるための場を設け、自分たちの考えが妥当であるか確認する。

態度である『スキル』と教科での学習活動との関連を明らかにすることによって、それを手段として応用して教科の学習に活かすとともに、教科の学習においてもそのスキルをさらに育成するということである。

IV 汎用的資質・能力の育成と各教科の在り方

本研究の対象とした学校園は、いずれも全教育課程において、資質・能力の育成をめざしていた。資質・能力は、平成 29 年改訂の学習指導要領で示されている、教科横断的な資質・能力の 3 つの柱（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）そのものではなく、それぞれの研究課題に基づいたオリジナルな資質・能力であり、21 世紀型能力である。学校園の教育課程等の特徴から、大きく 3 つに分けられる。第 1 は、汎用的資質・能力の育成をめざした新領域・新教科が中心となり、各教科等がそれと連携して汎用的資質・能力の育成をめざす教育課程である。各教科は、教科の本質、目標、内容等を踏まえたうえで、教科独自の資質・能力を明確にし、汎用的資質・能力との繋がりを探究している。第 2 は、新領域・新教科と各教科が対等に位置付けられ、それぞれがその特質を活かして独自に汎用的資質・能力を育成する教育課程である。獲得された資質・能力は、他の領域・教科にも活用することができ、相乗効果をもたらす。第 3 は、新領域・新教科を設定せず、各教科等を中心としながらも、全教育課程で共通の汎用的資質・能力の育成をめざす教育課程である。汎用的資質・能力を意識することによって、各教科の学習が深まっていく。いずれの研究校においても、提示された音楽科の資質・能力は教科の本質に根付いており、音楽科は汎用的資質・能力育成の手段とはなっていない。

全体を通じて明らかになったことは、どの教育課程においても、新領域・新教科と各教科における学習方法に共通性が見られることである。すなわち、汎用的資質・能力の育成のための学習方法が確立されるとそれが各教科の学習に活き、各教科独自の学習方法が深められるとそれが汎用的資質・能力の育成にも生きてくるのである。したがって、両者を繋ぐ根幹となるのは学習方法の開発といえるだろう。

引用・参考文献

- 香川大学教育学部附属高松小学校（2015）『文部科学省研究開発学校指定（第 3 年次） 分かち合い、未来を創造する子どもの育成—2 領域カリキュラムによる主体的、共感・協同的、創造的な学びの実現—』香川大学教育学部附属高松小学校
- 香川大学教育学部附属高松小学校（2017）『平成 28 年度 研究開発実施報告書（第 4 年次）』香川大学教育学部附属高松小学校
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター 勝野頼彦他（2013）『平成 24 年度プロジェクト研究調査研究報告書 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』国立教育政策研究所
- 上越教育大学附属中学校（2016）『持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒の育成 グローバル人材育成科の創設と 6 つの資質・能力（文部科学省研究開発学校 第 2 年次）』上越教育大学附属中学校
- 上越教育大学附属中学校（2018）『持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒の育成 グローバル人材育成科の創設と 6 つの資質・能力（文部科学省研究開発学校 第 4 年次）』上越教育大学附属中学校
- 新潟大学教育学部附属幼稚園・附属長岡小学校・附属長岡中学校（2016a）『平成 27 年度 研究開発実施報告書・第 3 年次』新潟大学教育学部附属幼稚園・附属長岡小学校・附属長岡中学校
- 新潟大学教育学部附属幼稚園・附属長岡小学校・附属長岡中学校（2016b）『各教科等カリキュラム資料』新潟大学教育学部附属幼稚園・附属長岡小学校・附属長岡中学校
- 広島大学附属小学校（2018）『文部科学省研究開発学校指定 平成 29 年度（第 4 次）研究開発実施報告書』広島大学附属小学校
- 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校（2018）『文部科学省研究開発学校指定校 研究開発実施報告書 平成 29 年度【第 6 年次（延長 3 年次）】』広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校
- 文部科学省（2017）「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」文部科学省